

の結果、サル被害が増えればサルを根絶すればよいと考えている。しかし、その中で比較的最近になってサルと接触するようになった地域で山の動物との共存や計画的開発を考えている人もいくらかはいるようである。当地区では、山林の開発による自然環境の変化がサル被害の増加の一因と考えられるので、今後、被害を予防する意味で、計画性のある開発が望まれる。

#### 野猿公苑における生態系の保全と野外博物館活動の研究

正高信男（学振奨励研究員）・和泉剛（関西相互環境センター）・岩井健二（鴨沂高）  
・太田映司（柏野小）

嵐山自然公苑は、研究上極めて重要な位置を占めると同時に、市街地に隣接しており、絶えずポピュレーション増大と猿害の発生という深刻な問題をかかえている。われわれが行った研究からは、次のような点が示唆された。

1. 研究期間中、数度にわたってリーダーの失踪がみられたが、それによって、集団がさして動揺する様子もなかった。嵐山集団に特有の条件の関与を考えねばならないが、餌付けによる集団の一定地点への求心的定着が強く関連していると思われた。
  2. ポピュレーションの増大は決して餌場の個体密度増大には結果せず、むしろ周辺化の促進と低順位メスとその子のそれへの参入が見られた。それは集団の分裂の可能性をはらむものとみなされ、その動態は極めて興味深い、同時に猿害に直結する問題でもある。
  3. それゆえ、公苑維持上の管理的理論として、および、研究の長期的継続の観点からも、ポピュレーションのある程度の調整はやむを得ぬ措置としてなさざるを得ない。そのためには、過去の研究経緯をふまえ、血縁関係その他を考慮しつつ、長期展望に立った研究者との緊密な連絡が必要であろう。
  4. 観光客による不特定の給餌は、研究活動にとっては妨害要因となった。もとより野猿公苑のひとつの目的として営利性があり、困難な面もあるが、改善の方向を模索したい点である。
- 野外博物館活動については、博物館の効率的な

運営や取組みを考えるために、観光客、友の会、小・中・高校生を対象に、意識調査を試みた。

1. 楽しむ場の横溢により、野猿公苑への関心は極めて低い。
2. 自然や動植物に対する実質的な認識は低く、見て楽しむ一時的なものである。等々。

上記分析結果に基づき、野猿公苑が多くの人達に、観察・活動・作業をする場面を提供し、有機的な取り組みと運営の工夫を進めつつある。

#### 課 題 2

志賀高原横湯川流域に住むニホンザル、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>、B<sub>2</sub>、C群の戸籍簿作り

常田英士（地獄谷野猿公苑）

ニホンザルの諸調査に際し、個体識別が必要である場合が殆んどである。更に群内の個体の血縁関係が分かっていると、多くの研究にとって有益である。

本調査は地獄谷野猿公苑に以前から蓄積されている資料に基づき、志賀高原の横湯川流域に生息するニホンザル志賀A<sub>1</sub>群（約140頭）、A<sub>2</sub>群（約80頭）、B<sub>2</sub>群（約35頭）、C群（約45頭）の戸籍簿を作成し、研究者が利用できるようにすることを目的とした。

昭和58年度はA<sub>1</sub>群、A<sub>2</sub>群の全個体について個体カードを作成し、血縁図を作った。A<sub>1</sub>群については3才以上、A<sub>2</sub>群については1才以上の全個体の顔写真を撮影し、個体カードに貼った。C群については約半数の個体の顔写真を撮った。昭和59年度にはC群の残りの個体とB<sub>2</sub>群と、過去に横湯川の各群に所属していたが現在はいないオスについての個体カードを作成する予定である。

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性

小見山章（岐阜大・農）・和田一雄（京大・霊長研）  
\* 共同実研者

森林におけるニホンザルの行動を規制するのは、食物の分布と冬期のとまり場である。我々は志賀高原横湯川流域において、食物となる森林植物の